

彼は夢を視る

夜深

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——まるで、『予知夢』のようじゃないか……ッ！

ある日、ある少年はある夢を見た。自分が現れる夢を見て少し不快だったが、次の日、夢と同じことが起き、彼は困惑する。

偶然か、それとも必然か。

それは、彼にもわからない。

これは、ある夢を見た少年が、そんな夢にならないと奮闘する話。

目次

## 最初の予知夢

夢を見た。

自分じゃなくて、自分の夢。

何を言っているのかわからないと思うけど、実際のことなのだ。

その夢の俺は、すっげー我が儘で、親大好きで、レアカード好きで、スイーツ大好きな奴だった。

まるでダメ男の模範解答みたいな奴で、正直こんなやつがいるのかと引いたが、何処からどう見ても俺だったので、何とも言えなかった。

しかも、今夢の俺がいる場所は、俺が通っている小学校。

何とも……何も言えない。何故自分の夢など見なければならぬのだ。どうせならスイーツの夢を見て幸せになりたい。

その日の二時間目の授業は体育だった。偶然だな。明日二時間目に体育があるのは同じだ。

そして、その授業内容がサッカーだった。まあ運動は大抵出来るから、別に困らない。

「いくぜー俺のシュート、ちゃんと見とけよお！」

夢の俺は自信満々にボールを蹴り上げる。

意外と上手かったのが悔しいが、こいつは夢の俺だから上手いは当然だ。何で自分を非難しようとしたのだろう。

結果は俺が二回ゴールを決めて、後半戦に突入した。

クラスの女子が応援する中、俺がボールを取りに行った時だった。

「危ない！」

「へっ………ぶへえ!？」

ボールを持っていたクラスメイトが誤って俺の顔面にシュートをぶち込んだ。

それをまともに受けた俺は、ぴよぴよとふらふらしながら倒れ

る。

「きやああ!!さ、沢渡くん!」

「おい!大丈夫か!?さー!さー!だれ!さー!さー!」

……あれ、先生の声が聞こえ辛くなった。

俺を保健室に運ぼうとしているのか?

もう少し、もう少しで聞き取れそうなんだ。

なあ、周りは何て言ってる!さー!さー!。

「……………あれ?」

気づけば朝だった。



……昨日は変な夢を見た。サッカーの時間で、クラスメートにボールをぶつけられ、それを心配した皆が何か言っている所で夢は終わってしまった。

何とも後味が悪い。しかも、次は二時間目で体育だ。

俺は持ってきた体操服に着替え始める。

その最中に、隣の男子が「なあなあ」と、俺に声をかけてきた。

「今日の体育はサッカーだってよ!まじ楽しみだなあ!」

「……………そうだなあ」

「あれ?お前嬉しくねえの?いつもこういう時って、『俺がシュート決めてやるから安心しやがれ!』って大声で言うんじゃないの?」

「……………」

何こいつ怖い。何夢の内容と同じこと言ってるの。まじ怖い。

驚きすぎて言葉も出ず、同時に不安になる。

まるで、夢の出来事が現実になろうとしていることに。

こういうのなんて言うんだっけ……正夢?

いや、まだ断定することは出来ない。この後のサッカーで、何が

起こるかわからないんだ……！

ノリで二点決めちまったよ。

しかも配置も声もボール持つてる奴も、全部夢の通りで怖いよ。

「よーし行くぞー！」

「沢渡ー！次も期待してるぞー！」

「……ああ、うん」

もう俺に期待の声を投げってくるのはやめてくれ。ただでさえ夢で混乱しているのに、俺に変なプレッシャーを投げかけるのはやめてくれ。

俺が棒立ちをしていると、走ってきたやつに背中を叩かれて半ば強引に取りに行かされる。俺はディフェンスだ。だから俺はここで守りを固めるんだ（震え声）。

そして、夢の通りに俺がボールを取りに行こうとした時だった。

「あ」

「あ」

思わず俺も声が漏れ、その瞬間がスローモーションになる。

ボールを持っていたクラスメートが、誤ってボールが俺の顔面に向かってくる。

「……」本当の、夢のように。

向かってくる、ボールが。

ボールが、俺の顔面に。

「ッ!!」

ぶつかるとはなかった。

俺は直前で横に避けることで、ボールをぶつけられることを回避した。でも尻餅はついたが、仕方がない。

「だ、大丈夫か!？」

「す、すまねえ沢渡ー！」

先生とクラスメートがこちらに駆け寄ってくるが、同時に俺の不安は再骨頂に達していた。

あれは、あの夢がなければ俺は保健室送りだ。

なら、あの夢は、何故見れたんだ？

これは正夢？いや、違う。

これは、まるで。

————予知夢のようじゃないか。

その後何事もなく、俺は無事に帰れたが、あの夢が気がかりであまり食欲が進まず、大好きなスイーツにも手をつけられなくて、パパに心配された。